まちを動かす ひと夢こころ 60

「輝く人」とは、夢のため、人のため、地域のため、一つのことに打ち込んで頑張っている人。それぞれ目的は違えど、その活動は、より良いまちづくりへとつながっています。「輝く人」の輝きを多くの方に知ってもらいたい、その思いが「輝く人」シリーズの原点です。

やさしい心や、ふるさとの温かさを思い出してほしい

青少年育成市民会議　副会長

泉　須美子 さん（82歳　白石1）

青少年育成市民会議の設立時から、伝統行事であるひな流しを守り続けて今年で41年目。

1月17日、青少年育成市民会議の皆さんがひなの頭作りを行いました。

大竹のひな流しの歴史は、江戸時代にさかのぼります。戦争とともに一度はなくなりかけたひな流しも、戦後になると俳人によって復活し、昭和48年からは、この行事を青少年育成市民会議が受け継いでいます。

毎年ひなの頭作りで作られる数は約2000～3000個。膨大な数ですが、皆で会話をしながら、いつも楽しく作業をしています。作ったひなの頭と折敷（おしき）は大竹地域の女の子に前もって配っています。

近年は稲を手で刈る農家が減り、桟俵（さんだわら）に必要なわらの入手が困難になってきました。準備に大変なこともありますが、ひな流しの継承に携わって一番やりがいを感じるのは、子どもたちがひなをそっと川に流し、手を合わせて祈る姿に出会えたときです。やさしい心の風景が見えるようで、心が温まります。

ひな流しには、子どもたちがお婆ちゃんやお母さんからひなまつりについての話を聞きながら、一緒に作ることにより、家族の絆（きずな）をより深める役割もあります。子どもたちが大人になったとき、ひな流しを思い出すことによって、やさしい心やふるさとの温かさを思い起こしてほしいです。そして、この伝統が、親から子どもに伝わり、また、次の子どもへと受け継がれていってもらえばと思います。